

No	部	室課	職名	氏名	成果名	概要
1	生産基盤研究部	水田利用研究室	上席専門研究員	田村 和彦	原種等生産・管理体制の見直しとマニュアルの改訂	原種等の円滑な生産と事故防止対策への迅速かつ柔軟な対応に加え、実施内容の見える化などチェック体制の明確化による取組強化を図るため、新たに具体的な取組内容等を明記した実施要領を制定した。併せて、原種等の生産・管理マニュアルの改訂・整備を行った。
	生産基盤研究部	水田利用研究室	上席専門研究員	木村 陽子		
	生産基盤研究部	生産システム研究室	上席専門研究員	吉田 宏		
	生産基盤研究部	生産システム研究室	主査専門研究員	伊藤 信二		
	園芸技術研究部	果樹研究室	専門研究員	遊佐 公哉		
	園芸技術研究部	花き研究室	上席専門研究員	中里 崇		
2	企画管理部	研究企画室	主査専門研究員	阿部 敦	研究員の能力向上及び育成方針策定	<ul style="list-style-type: none"> 研究費の確保が困難な状況で、研究員が自由な発案による調査を実施できないことから、1件当たり10万円の研究費を準備し、所内コンペによる審査会を実施した。審査会等の開催により、研究員の試験設計の企画能力及びプレゼン能力の向上を図った。 センターの研究員育成プログラムは個々の具体的な取組などの記載がなかったことから、新たに各部、所としての取組及び研究員個々の具体的な育成方法を記載した育成方針を令和4年1月に策定した。見直しにあたっては、各部、所からの意見集約及び調整を行い、内容についての充実化を図った。
	企画管理部	研究企画室	上席専門研究員	鈴木 元		
3	生産基盤研究部	生産システム研究室	上席専門研究員	吉田 宏	近年の気象を踏まえた高品質・良食味米生産に向けた水稻栽培可能地域の算定	「銀河のしずく」をはじめとする県産米全体の安定生産と品質・良食味向上の取組を一層強化するために重要となる栽培可能地域について、近年の温暖化等の気象傾向を踏まえた直播及び移植栽培について算定した。 (1) 「銀河のしずく」について、鉄コーティング湛水直播栽培の可能地域を算定 (2) 主要4品種「ひとめぼれ」「銀河のしずく」「いわてっこ」「金色の風」について、移植栽培の可能地域を算定
	生産基盤研究部	生産システム研究室	主査専門研究員	伊藤 信二		
4	生産基盤研究部	生産システム研究室	上席専門研究員	山口 貴之	生育診断や高精度作業に貢献する新たなスマート農業技術の開発	傾斜地ほ場でのオルソモザイク画像の撮影技術や、利用しやすい低コストのRTK-GNSSシステムの構築により、農業分野での生育診断や高精度作業などスマート農業技術の進展に大きく貢献 (1) 傾斜地ほ場におけるオルソモザイク画像の撮影技術 ・新たな発想により、既存のアプリケーション等を組み合わせ、これまで難しかった傾斜地ほ場のオルソモザイク画像の撮影を実現し、生産者の要望を解決 (2) 農業分野で活用できる低コストRTK-GNSSシステムを構築 ・高価格により導入が難しいRTK-GNSSシステムについて、安価で活用可能なシステムを発案し、試験研究の進展に貢献できる技術を構築
5	園芸技術研究部	果樹研究室	専門研究員	遊佐 公哉	りんご育成系統「岩手19号」、「岩手20号」の果実特性	近年、りんご栽培においても気象災害や生理障害の発生等が増大する中、早生・中生品種を中心に着色・熟期の遅れが顕著となり、収穫遅れによる品質の低下が問題となっている。 そこで、本県の気象条件に適し、品質良好で栽培特性に優れ、消費者嗜好に適合したオリジナルりんご品種の育成に取組み、有望な早・中生系統を選抜しその特性を取りまとめた。
6	園芸技術研究部	野菜研究室	専門研究員	佐々木 達史	春まきたまねぎ大規模栽培における地干し作業の効率化と収益向上に資する技術の開発	(1) 春まきたまねぎ栽培における地干し乾燥時の収穫開始の目安 県内で栽培されている主要3品種(もみじ3号、ガイヤ、トタナ)における収穫開始目安は根切り11～14日後である。なお、地干し乾燥期間中は根切り後4週間までは腐敗球率の増加は認められない。 (2) 春まきたまねぎ栽培における地干し乾燥時の日焼け球の発生 令和3年7月の35℃を超える異常高温下で春まきたまねぎの根切り処理を行い地干し乾燥したことで、根切り2日後から一定の割合で日焼け球が発生することを明らかにした。当面の対応策は35℃に近くに達する晴天日の根切り作業は控える。
	園芸技術研究部	野菜研究室	主査専門研究員	横田 啓		

No	部	室課	職名	氏名	成果名	概要
7	園芸技術研究部	花き研究室	専門研究員	小澤 傑	鉢花向け濃桃色りんどう品種「Bzc-1_mut1」の育成	鉢花りんどうにおいて、「敬老の日」の需要期以降にセット販売を可能とする花色のバリエーションの充実が求められていた。 そこで、青色品種「Bzc-1」(H30成果公表)に重イオンビームを照射して、鮮やかな濃桃花色の品種を育成した。
	園芸技術研究部	花き研究室	主査専門研究員	小田島 雅		
8	園芸技術研究部	花き研究室	主査専門研究員	小田島 雅	りんどうの千鳥疎植栽培の特許取得	りんどうの振興に向けこれまで以上に生産性を高める技術開発が求められていた。 そこで、労力やコストを削減しつつ、収量の向上が期待できる千鳥疎植栽培技術の有効性を示すとともに、他県産地での技術の模倣を回避するため、特許を取得し、本県で技術を囲い込むことに成功した。
9	園芸技術研究部	南部園芸研究室	首席専門研究員 兼室長	熊谷 拓哉	研究活動の計画的進展と大船渡地区の園芸振興	南部園芸研究室では、今年度研究予算が大幅に削減される中、3名の職員が相互に補完しあいながら協力し限られた研究資源を効率的に活用しつつ、一方で、所内コンペにおいて第1位となるなど予算獲得に工夫を凝らし研究活動を計画的に進展させた。 また、大船渡管内の各関係機関との連携を強化し研修会に対応しつつ、二つの法人経営体に対する社会実装を行い、両法人の経営改善への取組を通じて園芸振興に貢献している。
	園芸技術研究部	南部園芸研究室	主査専門研究員	高橋 大輔		
	園芸技術研究部	南部園芸研究室	専門研究員	佐藤 聡太		
10	生産環境研究部	病理昆虫研究室	技師	西村 穂花	「大豆種子生産における耐性菌発生リスクを考慮した紫斑病防除体系」の成果提示	(1) 大豆の重要な子実病害である紫斑病の被害面積は最近増加傾向(H30:0ha⇒R2:692ha)にあり、増加の要因は、主に気象(感染好適条件の出現頻度)によるところが大きい。 (2) 一方、国内で薬剤耐性菌の発生が問題となっているQoI剤やDMI剤は、無人ヘリ散布が可能で、防除効果が高いため、県内でも広く使われている。これらの耐性菌の存在は、幸いにも一部の一般圃場に限られ、直接的な被害には結びついていない。 (3) 今後、懸念される耐性菌の発生・被害の拡大を未然に防ぐため、種子生産場面(採種ほ等)を対象に、廉価で極めて有効な防除対策を提示した。すなわち、ジマンダイセン水和剤を、大豆の開花期25日後と35日後の2回散布する体系で、この体系による種子を用いれば、耐性菌発生リスクを最小限にとどめ、一般栽培で効果の高いQoI等を使用継続できる。 以上のように、現地の課題に即応し、恒久的な対策を提示したことは、今後の大豆の安定生産に貢献するところが大きい。
	生産環境研究部	病理昆虫研究室	主査専門研究員	岩館 康哉		
11	生産環境研究部	土壌肥料研究室	専門研究員	白木 正俊	「小麦栽培における緑肥作物の導入効果」の提示	(1) 本県小麦栽培は、転換畑で連作される事例も多く、排水のほか、地力低下による収量や品質への影響が大きい。有機物補給がその対策となるが、特に緑肥作物の導入については、知見が少なく、失敗した事例も少なくない。 (2) 本技術成果は、昨年度明らかにした緑肥作物の種類とすき込み後の窒素の無機化特性等に基づき、小麦栽培における緑肥作物(ソルガム、クロタラリア)のすき込み時期と主作物の増収効果、土壌中の可給態窒素の推移等を明らかにしたものの。 以上のように、現地の課題に即応し、調査結果をもとに緑肥作物の導入効果を引き出すための技術成果を提示したことは、今後の小麦安定生産に貢献するところが大きい。
12	病害虫防除部	病害虫防除課	主査	佐藤 千穂子	「トマト萎凋性病害診断の傾向と診断のポイント」の提示	平成20年度から令和2年度まで病害虫防除課に診断依頼された実績のうち、トマトおよびミニトマトの診断事例67件について検証した。 病害名は、ナス科萎凋性病害診断培地またはイムノクロマトキットにより特定し、各病害の発生時期や初期症状の特徴等を整理した。 得られた成果は、令和3年度病害虫防除技術情報「トマト萎凋性病害診断の傾向と診断のポイント」として取りまとめ、いわてアグリベンチャーネットにより情報発信した。